

PROGRAM

プログラム

シューベルト (1797-1828): 最晩年の歌曲集「白鳥の歌」とピアノ・ソナタから

『愛の使い』 Liebesbotschaft D957-1 [詩 レルシュタープ]

『兵士の予感』 Kriegers Ahnung D957-2 [詩 レルシュタープ]

『セレナーデ』 Ständchen D957-4 [詩 レルシュタープ]

ピアノ・ソナタ 第19番 ハ短調 D958 ～第3楽章 (ピアノ・ソロ)

『漁師の娘』 Das Fischermädchen D957-10 [詩 ハイネ]

『海辺にて』 Am Meer D957-12 [詩 ハイネ]

『ドッペルゲンガー』 Der Doppelgänger D957-13 [詩 ハイネ]

『海辺にて』 Am Meer D957-12 [詩 ハイネ]

ピアノ・ソナタ 第21番 変口長調 D960 ～第2楽章 (ピアノ・ソロ)

『鳩の便り』 Die Taubenpost D965A [詩 ザイドル]

— 休憩 —

中田 喜直 (1923-2000): 鳩笛の唄 [詩 清水 みのる (1903-1979)]

石渡 日出夫 (1912-2000): 汚れっちまった悲しみに [詩 中原 中也 (1907-1937)]

橋本 國彦 (1904-1949): お六娘 [詩 林 柳波 (1892-1974)]

橋本 國彦 (1904-1949): 三枚繪 (ピアノ・ソロ)

1. 雨の道
2. 踊子の稽古帰り
3. 夜曲

佐藤 卓史 (1983-): あどけない話 [詩 高村 光太郎 (1883-1956) 《智恵子抄》より]

* 世界初演

加藤 昌則 (1972-): レモン哀歌 [詩 高村 光太郎 (1883-1956) 《智恵子抄》より]

PROGRAM NOTES

解説

文: 佐藤 卓史

シューベルト: 歌曲集《白鳥の歌》D957 と 最晩年のピアノ・ソナタより

《白鳥の歌》はシューベルト最晩年の歌曲を没後に束ねた「遺作集」。「三大歌曲集」として肩を並べる《美しき水車屋の娘》《冬の旅》のようなストーリーのある連作歌曲ではなく、3人の詩人による14曲を集めたものだが、“不在”というテーマが保続低音のように鳴り続けている。愛する人は今ここにはいない、その憧れと痛みが透徹した美しさの中で表現されていく。

本日は全14曲から7曲を抜粋し、詩人の入れ替わるポイントに“間奏曲”として、同じく1828年に書かれたピアノ・ソナタの楽章を差し挟んで演奏する。

レルシュタープの詩による歌曲より

ベルリン生まれのルートヴィヒ・レルシュタープ (1799-1860) は崇拝するベートーヴェンに自詩を送り付曲を期待したが、果たされぬまま巨匠は没する。側近のシントララーがシューベルトに転送し、付曲された約10曲のうち7曲が《白鳥の歌》の前半に収められた。

『愛の使い』 《水車屋》の世界観を受け継ぐ冒頭曲。小川のせせらぎを表すピアノの分散和音の上で「銀色に光るざわめく小川よ…僕の使いになって、遠く離れた彼女に僕の挨拶を届けておくれ」と爽やかに歌う。

『兵士の予感』 戦地の深夜の重苦しい描写から始まる。疲れた兵士は「幾度甘く夢見たことか、彼女の温かい胸に抱かれることを」と熱く歌い、進軍の太鼓の連打に心を奮い立たせる。通作形式 (詩の内容とともに音楽が移り変わる) で、1語1語に託された音楽の濃度はのちの表現主義を予感させる。

『セレナーデ』 「秘めやかに闇を縫うわが調べ」の日本語訳 (堀内敬三) でもおなじみの美しいメロディー。短調と長調の境界を自由に往来するシューベルト晩年の真骨頂といえよう。マンドリン片手に歌い始める「僕」は、しかし恋人の窓辺ではなく「静かな森の奥」にいて、震えながら「ここへ来て、僕を幸せにしておくれ!」と届くはずのない想いを歌い続ける。ただ木々の梢や、小夜啼鳥だけが彼の闇雲な情熱を知っている。

ハイネの詩による歌曲より

最晩年の1月、友人宅での朗読会でハインリヒ・ハイネ(1797-1856)の詩に出会ったシューベルトは詩集《歌の本》より「帰郷」編の6曲に付曲。これらが《白鳥の歌》の後半を構成している。

『**漁師の娘**』 ピアノの波のリズムに乗って「美しい漁師の娘さん、舟を岸につけて、僕の隣にきて手を握り合おう」と言葉巧みに口説くプレイボーイ。「美しい水車屋の娘」にもこんなふうにストレートに愛を伝えられたらよかったのにね、と思うほど微塵の陰りもない。

『**海辺で**』 『漁師の娘』の後日譚ともとれるが事態は一変している。美しい海の静かな夕暮れ、「漁師の家」では男女が黙っている。彼女の目から手に涙がこぼれ、「僕」はその手から涙をすする。「そのときから僕の体は衰弱し、魂は憧れのせいで死にそうだ。あの不幸な女は、涙で僕に毒を盛ったんだ」というホラー的展開となるが、音楽はただただ美しく、何事もなかったのかのように円満に曲を閉じる。そして本当のサイコが始まる。

『**ドッペルゲンガー(影法師)**』 月の夜、かつて恋人が住んでいた家の前を通った「僕」は、そこにもだえ苦しみながら佇む男の姿を見る。月明かりに照らされた男の顔は、「僕」自身のものだった。「ドッペルゲンガー、青ざめた友よ、なぜお前は真似するのか? ずっと昔、同じ場所で僕を苦しめた愛の痛みを…」言葉は歌というよりむしろ語るように紡がれ、ピアノの低音域の和音が鬼気迫る恐怖を演出する。《冬の旅》の最終曲『ライアー回し』と並ぶ、芸術歌曲の極北の世界。これで曲集を閉じるのはあまりにも救いがないと思われたのか、ハイネの毒の“解毒剤”が最後に用意された。

ザイドルの詩による『鳩の便り』(D965A)

ヨハン・ガブリエル・ザイドル(1804-1875)はシューベルトティアーデの仲間で、この頃は「使えそうにない」詩をシューベルトに渡して困らせたりする若者だった(オーストリア国歌『皇帝讃歌』の詩を担当するまでの文豪になるのはずっと後の話)。やや未熟な言葉選びの隙間を埋めるように、シューベルトの親密な音楽が雄弁に語り出す。愛する人のもとへ、毎日想いを運んでくれる伝書鳩。手紙を書く必要もない、涙すら鳩は届けてくれる…そんな寓話風のストーリーが、鳩の鳴き声を模した軽やかなピアノパートにのせて延々と語られる。最後に明かされるその鳩の名は、「憧れ」。憧れを歌い続けたシューベルトは、この曲を書いた直後に31年の生涯を閉じた。

《智恵子抄》と近現代百年の日本の音楽

『**鳩笛の唄**』 『早春賦』の中田章を父に持つ日本歌曲界のサラブレッド中田喜直(1923-2000)は親しみやすい作風で定評があるが、清水みお(1903-1979)の詩による本作は内省的な1曲。ピアノの前奏が模倣する鳩笛の素朴な音色に「亡き友」を偲び、「岩木山」「津軽」という具体的な地名とともに、晩秋の日暮れの冷たい雨と「涙」が重ね合わされる。短い中にダイナミックな世界が構築されていく。

『**汚れっちまった悲しみに**』 夭折の天才詩人中原中也(1907-1937)の代表作。珍妙なバンカラ口調のリフレインと、「たとへば狐の革裘(かわごろうも)」「懈怠のうちに死を夢む」といったハイブローな比喩や仏教概念が絶妙なコントラストを形作る。芸術歌曲から歌謡曲までさまざまな付曲がなされているが、石渡日出夫(1912-2000)による作品は変化和音を多用したフランス歌曲の趣で、どこか斜に構えた詩人の心情にフォーカスするかのようだ。

『**お六娘**』 石渡に影響を与えた作曲界のスーパースター橋本國彦(1904-1949)。東京音楽学校(現在の東京藝術大学)でヴァイオリンを学びながら作曲を独習、最先端の西洋音楽と日本の伝統音楽を融合した斬新な作品で一躍注目を集める。林柳波(1892-1974)の詩による本作は1929(昭和4)年の作品で、「和風モノオペラ」ともいべき大曲。秋の宵、村の祭り帰りの若者たちが二十歳の丸顔美人「お六娘」を呼び出そうと試みる…そんな軽妙なストーリーが「〜ござる」という擬文語調の統一語尾で語られ、独特の味わいをもたらす。作曲者が「単に保守的な伝統を以て第一義とせず、常に進んで新鮮なる独自の手法をも混合して、民謡を藝術的に活かす」(初版「はしがき」)と述べているとおり、音楽は単なる邦楽の模倣ではない。早くも前奏で提示される陰旋法(都節)と陽旋法(田舎節)の自在な切り替えが曲全体にマルチモーダルな立体感を与え、さらに西洋的な「転調」(主音の移動)や、歌唱声部の細かいメリスマ、シェーンベルクばりの幅広いポルタメントを駆使しながら、秋の夜の情景から男女の攻防までをドラマティックに、そしてコミカルに描いていく発想と技術には驚嘆するほかない。

PROFILE プロフィール

『三枚繪』『お六娘』の5年後、1934(昭和9)年の作品。日本画家・**鏗木清方**(1878-1972)の三連美人画の印象に基づくピアノ組曲である。かねてより共同作業を行っていた日本舞踊家の**花柳寿美**(1898-1947)の振付・舞で、同年10月に歌舞伎座で初演された。和傘に高下駄で雨の中を急ぐ花柳界の女を描いた「新富町」(『**雨の道**』)、艶やかな着物姿の若い娘が歩く「浜町河岸」(『**踊子の稽古帰り**』)、妙齡の婦人のシックな黒い羽織が夜の空気をキリリと引き締める「築地明石町」(『**夜曲**』)と、三者三様の日本の「美」をドビュッシー風の音使いで表現している。

この連作を「こよなき記念」として橋本は欧州へ旅立ち、3年の留学を経て帰国する頃には日本は国粹主義に傾いていた。もともと日本の伝統文化と親和性の高かった橋本は戦時下に愛国・好戦的な楽曲を多数発表。敗戦後にその責任を問われて母校主任教授の職を追われ、失意のうちに胃癌に冒され44歳で早世した。

《智恵子抄》より『あどけない話』『レモン哀歌』

彫刻家・**高村光太郎**(1883-1956)が妻**智恵子**(1886-1938)の死の3年後に発表した詩集《**智恵子抄**》には、運命の出会いから芸術家同士の結婚生活、統合失調症の発病、闘病、死別までの愛の軌跡が綴られている。飾り気のない言葉で心情を歌い上げる無骨なスタイルは、文学の専門家ではない詩人ならではの魅力に溢れ、日本近代詩では異例ともいえる多くの共感を集めている。

小学生のときに《**智恵子抄**》に出会った筆者(佐藤)もそのひとりで、いくつかの曲に付曲を試みたが、今回**藤木大地**氏の協力を得て『**あどけない話**』の世界初演が実現する。寡黙な夫婦の会話のような低音域と高音域の反復がオスティナートのように全曲を貫く。ある朝「東京に空がない」と言い出す**智恵子**、驚いた「私」の眼前には「むかしなじみのきれいな空」が広がる。「**智恵子は遠くを見ながら言ふ。阿多多羅山の山の上に毎日出てゐる青い空が智恵子のほんとの空だといふ。**」ふと望郷の念にとらわれた妻と、それを聞く夫の他愛のない日常。しかし後から振り返れば、妻の抱える閉塞感に気づかず、あまつさえ「あどけない話」と総括する夫の態度に危機の芽が潜んでいる。

精神病院で迎えた**智恵子**の最期を詠った『**レモン哀歌**』は、宮沢賢治の『**永訣の朝**』と並ぶ永別の詩として名高い。「あなたの咽喉(のど)に嵐はあるが/かういふ命の瀬戸ぎはに/**智恵子はもとの智恵子となり/生涯の愛を一瞬にかたむけた**」簡潔な言葉選びが哀感を際立たせる。歌曲を中心に抒情的な作品群で知られる**加藤昌則**(1972-)は散文調の原詩を柔らかく揉みほぐすように旋律化する。作曲者自身が「死への美しすぎる情感を、敢えて後年に浄化したものとして捉えて書いた」と述べており、回想にも似た距離感と不思議な明るさを伴った印象深い歌曲である。



公式サイト
www.daichifujiki.com

藤木 大地 Daichi Fujiki, Countertenor

2017年、オペラの殿堂・ウィーン国立歌劇場にライマン『**メデア**』ヘロルド役で鮮烈にデビュー。東洋人のカウンターテナーとして初めての快挙で、大きなニュースとなる。2012年、第31回国際ハンス・ガボア・ベルヴェデーレ声楽コンクールにてハンス・ガボア賞を受賞。同年、日本音楽コンクール第1位。2013年、ボローニャ歌劇場にてグルック『**クレリアの勝利**』マンニオ役でヨーロッパデビュー。国内では、主要オーケストラとの公演や各地でのリサイタルがいずれも絶賛を博している。

新国立劇場2020/21シーズン開幕公演では、プリテン『**夏の夜の夢**』にオーベロン役で主演、続けてバッハ・コレギウム・ジャパンとのヘンデル『**リナルド**』でもタイトルロールを務める。

2021年、3枚目のアルバム「いのちのうた」がキングインターナショナルよりリリースされた。2023年は<全国共同制作オペラ> J.シュトラウスII世『**こうもり**』オルロフスキー役をはじめ各地でオペラ公演や演奏会へ出演。デビューから現在まで話題の中心に存在する、日本が世界に誇る国際的なアーティストのひとりである。

洗足学園音楽大学客員教授。横浜みなとみらいホール 初代プロデューサー(2021-2023)。2024年度より大和高田さざんかホール レジデント・アーティスト。



公式サイト
www.takashi-sato.jp

佐藤 卓史 Takashi Sato, Piano

秋田市出身。高校在学中の2001年、日本音楽コンクールで第1位。東京藝術大学を首席で卒業後渡欧、ハノーファー音楽演劇大学ならびにウィーン国立音楽大学で研鑽を積む。その間、2007年シューベルト国際コンクール第1位、2010年エリザベート王妃国際コンクール入賞、2011年カントゥ国際コンクール第1位など受賞多数。

ウィーン楽友協会をはじめとするヨーロッパの主要コンサートホールのほか、2011年にはシリア・ダマスカスのダール・アル・アサド文化芸術劇場でソロ・リサイタルを開催した。これまでにNHK交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、広島交響楽団、シドニー交響楽団、ベルギー国立管弦楽団等と共演。

2007年にソロデビューアルバム「**ラ・カンパネラ~珠玉のピアノ小品集**」(ナミ・レコード)をリリース以来、レコーディング活動にも力を入れており、日本と欧州で多数のCDを発表。

2014年より「**佐藤卓史シューベルトツィクルス**」を展開、ライフワークとしてシューベルトのピアノ曲全曲演奏に取り組んでいる。

室内楽、作編曲など幅広い分野で活躍している。



←各公演のアンコール曲は、順次こちらに掲載しております。

皆様のご来場の記念に

全曲目終了後の拍手の間のみ
舞台上の演奏者を撮影する「特別タイム」
を設けております♪



「特別タイム」設定日は、開演まで舞台上にご案内を掲示!

禁止事項

- ・設定日以外の撮影 ・動画撮影
- ・演奏中の写真撮影(アンコール時、演奏者から許可があった場合を除く)
- ・フラッシュの使用 ・自席からの移動 ・立ち上がったの撮影
- ・手を高く上げての撮影など、周りのお客様のご迷惑になる行為

上記の他、SNSへの利用の際は、周りのお客様のうつりこみにもご配慮ください

「特別タイム」は、皆様の周りへの「思いやり」と「配慮」のもと運営しております。
ご協力をお願い致します。

お互いに気持ちよく演奏を楽しむために

- ★携帯電話は音や振動が出ない設定に。
- ★大きな声での会話は、ホワイエで。座席では静かにお過ごしください。
- ★拍手は、1曲全てが完全に終わるまでお待ち下さい。余韻を大切に。
- ★演奏中の物音にご配慮を。
 - ・プログラムやチラシをめくる音、膝から床に落とす音
 - ・鉛やティッシュ、ハンカチを取り出す音
 - ・キーホルダーやストラップについた鈴の音
 - ・ビニール袋などのガサガサ音

鑑賞中に体調に異変を感じた場合は、演奏中でも遠慮なく最寄のドアからご退出ください。
お近くのお客様のご理解・ご協力をお願いいたします。

- ・館内各所にアルコール消毒液を設置しております。手指消毒にご利用ください。

カウンターテナー ピアノ
藤木 大地 佐藤 卓史
白鳥の歌／智恵子抄



2024年7月6日(土) 14:00開演

主催:宗次ホール